

Théodore Duret



アーティゾン美術館蔵書展示

INFO ROOM

Théodore Duret

書籍案内

テオドール・デュレについて日本語で書かれた文献や、本リーフレットでとりあげた著作物の和訳文献としては下記があります。

- 稲賀繁美 「デュレを囲む群像：ジャポニズムの一側面」
平川祐弘編『異文化を生きた人々』中央公論社、1993年、357-387頁
- 稲賀繁美 「アンリ・セルヌーシとテオドール・デュレ：コミュニケーション、アジア旅行、美術蒐集」『近代画説』7号、1998年、42-58頁
- 稲賀繁美 『絵画の東方：オリエンタリズムからジャポニズムへ』
名古屋大学出版会、1999年
- 大島清次 『ジャポニズム 印象派と浮世絵の周辺』美術公論社、1980年
* 『日本の挿絵本及び画帖類』（1900年）序文の和訳が収録されています。
- クリストフ・マルケ 「アンリ・チェルヌスキとテオドール・デュレが見た明治4年の日本」丹尾典安訳『近代画説』8号、1999年、12-32頁
- 小林太市郎 「日本美術及び印象派絵画とテオドール・デュレ」
『北斎とドガ（小林太市郎著作集2 東洋と西洋篇）』淡交社、1974年、
277-298頁
- テオドール・デュレ 『印象派の人人』本多良静訳、洛陽堂、1922年
* 『印象派の画家たちの歴史』（1906年）をドイツ語版から和訳した本です。
- 三浦篤・中村誠監修 『印象派とその時代 モネからセザンヌへ』美術出版社、
2003年
* 『印象派の画家たち』（1878年）の和訳が収録されています。

本冊子のテキスト作成にあたり上記を参照しました。

東西都市文化を経験した美術批評家 — テオドール・デュレ

アーティゾン美術館は、所蔵品にかかわる貴重図書資料の収集を続けており、4階インフォールムでその一例をご紹介します。今回は、6-5階の展示室で開催されている展覧会「琳派と印象派 東西都市文化が生んだ美術」にちなんで、19世紀後半に江戸とパリの東西都市文化を経験した美術批評家、テオドール・デュレの著作をご紹介します。



エドゥアール・マネ
《テオドール・デュレの肖像》1868年
油彩・カンヴァス、46.5×35.5cm
パリ市立プティ・パレ美術館蔵

Edouard Manet, *Portrait of Théodore Duret*
1868, Oil on canvas, 46.5×35.5cm
Petit Palais, musée des Beaux-arts de la Ville de
Paris. CC0 Paris Musées / Musée des Beaux-Arts
de la Ville de Paris, Petit Palais

アーティゾン美術館蔵書展示

東西都市文化を経験した美術批評家—テオドール・デュレ

会期：2020年11月3日（火）—2021年1月24日（日）

会場：アーティゾン美術館 4階 インフォールム

企画・執筆：黒澤美子

公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

www.artizon.museum

©2020 Artizon Museum, Ishibashi Foundation

ジャーナリストで美術批評家のテオドール・デュレ（1838-1927）は、フランス西部の町サントに生まれ、コニャック商を営む裕福な家庭で育ちました。20代から選挙活動に傾倒したデュレは29歳でパリに居を移し、政治ジャーナリストとして活動を展開していきます。同時にマネやピサロなど同時代の画家たちと親交を深めると、その革新性から初めは人々に受け入れられずにいた印象派の作家たちを先駆けて擁護しました。またデュレは1871（明治4）年10月から翌年2月まで、銀行家のアンリ・チェルヌスキ（1821-1896）とともに日本を訪れ、江戸や京都などの都市を実際に見て回りました。そして帰国後、マネや印象派の作家を積極的に論じていく傍ら、日本美術を紹介する記事や本も著していくこととなります。本展では当館所蔵のデュレの著作から、東西都市文化を横断した一人の批評家の眼差しをたどります。



rapportent notre argent et qu'ils viennent reprendre leur monnaie, vous pouvez penser de quelle manière nous les recevons ! Ce qui est fait est fait. Après être ainsi revenus à la charge plusieurs jours de suite, en nous contant toutes sortes de fables pour nous attendrir, apprenant que le Bouddha rapidement emballé est déjà en route pour Yokohama et l'Europe, ils prennent le parti de ne plus reparaitre.

Lorsque nous eûmes épuisé le terrain à Yokohama et à Yedo, nous continuâmes nos recherches dans les autres villes du Japon à Kobé, Osaka, Kioto et Nagasaki. Puis venus en Chine, nous explorâmes Pékin, Dolanor en Mongolie, Han-Kaou sur le Yan-tse et Canton. Nous étions à ce moment naturellement devenus fort experts dans la manière de se conduire avec les Japonais et les Chinois, nous savions faire ouvrir toutes les portes après celles des marchands et celles des collectionneurs et des temples. C'est ainsi que, commencée d'abord par hasard, la collection des bronzes a pu être continuée systématiquement, par la demande de toutes les séries, de toutes les sortes d'objets, qui ont fini par former un ensemble complet.

(右) デュレの記事部分。「横浜と江戸の地を見尽くした後、日本の他の都市での調査を神戸、大阪、京都、長崎で続けました。」と書き記されています。

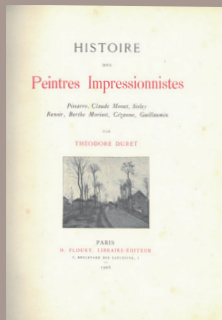
1. テオドール・デュレ
『美術小報 (テルヌスキ美術館)』
『ラ・ルヴュ・ブランシュ』17巻130号
1898年11月1日、381-386頁

Duret, Théodore. "Petite Gazette d' Art (Le Musée Cernuschi)." *La Revue Blanche*. Tome 17, N.130, 1 November 1898, pp.381-386
石橋財団アーティゾン美術館蔵

共和主義者であったデュレは、共和派の新聞『ル・シエクル (Le Siècle)』に定期寄稿していました。それを機に、同新聞の所有者であるミラノ出身の銀行家アンリ・チェルヌスキと親交を深めます。1871年、2人は普仏戦争から続くパリの政治的混乱を避けてアジアへの周遊旅行を決心します。同年9月から翌年1月まで続いた旅のうち、1871(明治4)年10月から翌年2月までを日本で過ごした2人は、各地で日本の美術品や書物の収集に勤しみました。

帰国後、デュレは『ル・シエクル』に旅行記の連載を発表し、それをまとめて『アジア旅行 (Voyage en Asie)』として上梓します。一方チェルヌスキは持ち帰った美術品を礎に、パリでアジア美術専門の美術館、現テルヌスキ美術館(パリ市立アジア芸術美術館)を開館するに至りました。

本書は19世紀末の前衛文芸誌『ラ・ルヴュ・ブランシュ』で、本号にはデュレがテルヌスキ美術館の概要やコレクション収集について説明した記事が掲載されています。記事の中でデュレは、自身の著作『アジア旅行』を引用しながら、日本での美術品収集の体験を綴りました。商品1点1点が布で覆われ中身が見えない店の独特な陳列方法、何を質問したらよいかも分からない状況、1杯のお茶から始まり何時間も会話が続く果てしない交渉形式に戸惑いながらも、廃仏毀釈の時代背景が手伝い、多くの作品を収集する機会に恵まれたことが書き残されています。そして横浜、江戸、神戸、大阪、京都、長崎といった日本の各都市を移動しながら調査を続けた足取りを、本記事から窺うことができます。



2. テオドール・デュレ
『印象派の画家たちの歴史』パリ、フルリー、1906年

Duret, Théodore.
Histoire des Peintres Impressionnistes. Paris, Floury, 1906
石橋財団アーティゾン美術館蔵

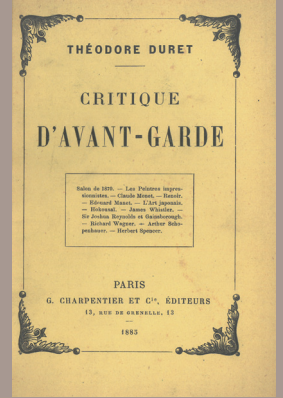
デュレはジャーナリストとして活動する一方で、マネや印象派の画家たちと親睦を深め、1878年に小冊子『印象派の画家たち (Les Peintres Impressionnistes)』を刊行します。その目的は「印象派の画家たちについてまわる不当な侮辱に異議を唱える」ことでした。そこでデュレは、印象派の革新的な色使いを擁護する手立てとして、旅を経て知見を得た日本の美術を引用しています。日本の浮世絵版画の一角雑多な配色は実際の情景を忠実に再現し得ていることを、日本の景色をその眼で見た筆者は知っていると述べ、そうした日本の彩色法を理解し自らの絵画に応用してみせたのが印象派の色づかいなのだと言ったのです。

本書はその小冊子を元とし、ピサロ、モネ、シスレー、ルノワール、モリゾに加え、セザンヌとギヨーマンを印象派の代表として収録し、総論を改訂して書籍にまとめ上げたものです。新進気鋭の作家たちの紹介と援護に主眼が置かれた小冊子と比べ、30年弱を経て書かれた本書は、その後の印象派展の歩みや出来事を振り返った歴史的な著述となっています。

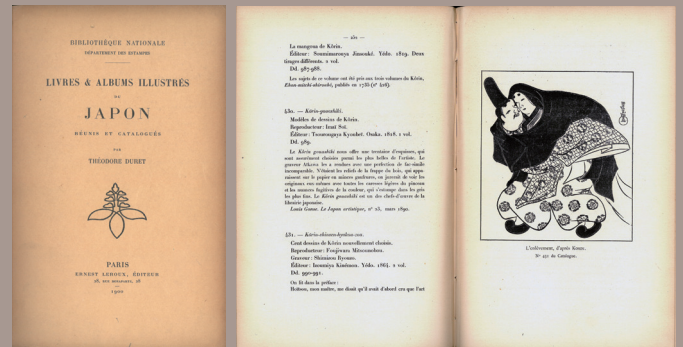
印象派と日本美術を関連づけたデュレの記事については様々な議論がありますが、遠い異国を訪れその土地の文化や光景に実際に触れたという自負と、そうした我が物にした異文化の見識に拠って同時代の作家を論じていく批評家としての気概、それら作家たちの歩みを歴史化とよとする眼差しが表れた書物は、現代の読者にとっても多様な読み方ができる興味深い史料となっています。

3. テオドール・デュレ
『前衛批評』パリ、シャルバンティエ、1885年

Duret, Théodore. *Critique d'Avant-Garde*.
Paris, Charpentier, 1885
石橋財団アーティゾン美術館蔵



デュレはアジア旅行からの帰国後、印象派をはじめ同時代の作家評論を精力的に展開する傍ら、美術雑誌に日本美術を紹介する論文も発表していきます。そうした日本美術に関する論考を含め、1870年のサロン評や、モネ、ルノワールといった印象派の画家について様々な媒体に書き重ねた記事を1冊に集めたのが本書です。「日本美術」という章では、刀剣、茶道具、着物、仏像から、狩野派や光琳、乾山にまで言及されており、北斎には1つの章が割かれています。当時革新的だった画家たちを擁護する記事を集めた「前衛」と名がつく書物に、彼らが参照した日本美術を紹介する記事も収められている点は、デュレの視座をよく表しています。前掲書にも見られたように、彼は東西都市が生んだそれぞれの芸術を、自らの眼で経験し、両者の関連を言葉で探り求めました。時代の先端をいく芸術や、西洋美術の伝統とは異なる芸術を、人々へ向け解きほぐし伝えていこうとする、批評家としての野心が束ねられている一冊です。



4. テオドール・デュレ、
(フランス) 国立図書館版画室編
『日本の挿絵本及び画帖類』
パリ、エルネスト・ルルー、1900年

Duret, Théodore ; Ed. Bibliothèque Nationale (France)
Cabinet des Estampes.
Livres et Albums Illustrés du Japon.
Paris, Ernest Leroux, 1900
石橋財団アーティゾン美術館蔵



(右) デュレの『日本の挿絵本及び画帖類』に引用された図版頁。

日本旅行をきっかけに、日本の挿絵本や画帖類を収集し始めたデュレは、帰国後も地道に収集活動を続けました。その量は1,000冊以上におよび、現在はパリにあるフランス国立図書館版画室に所蔵されています。本書はそのコレクションの目録です。本書には例えば、尾形光琳に関する画帖が6冊収録されています。酒井抱一が出版した『光琳百図』(1815(文化12)年-1826(文政9)年)や、抱一の弟子にあたる池田孤邨(こそん)が編纂した『光琳新撰百図』(1864(元治元)年)などが紹介されており、一部図版も掲載されています。(4, 5 参照)

本書の序文でデュレは、日本で書店漁りに奮闘した収集活動の初期、知人の学者から手ほどきをうけてコレクションを補充した中期、ジャポニスムの隆盛により古版画本が西洋にも流通したことでさらなる拡充が進んだ後期と、コレクション形成を振り返っています。そして特筆すべき点は文献情報の羅列にとどまらず、作家や文献について解説や分析が付されていることです。東西両都市で集めた日本美術の文献の、歴史的意義や意味まで理解しようとしていた真摯な姿勢が本書から伝わってきます。デュレはこうした地道な努力によって日本美術を理解し、それに原動力を得ながら、日本美術の様式を応用して絵画に革新をもたらした同時代の画家たちを励まし、言葉で支えてきたのです。

5. 参考：
尾形光琳画、池田孤邨編
『光琳新撰百図』清水柳三郎
1864年、上下二巻組
Illustration. Ogata, Korin ;
Ed. Ikeda, Koson.
Korin Shinsen Hyakuzu.
Shimizu, Ryuzo, 1864. 2 vols.
石橋財団アーティゾン美術館蔵